鏑木清方文集

白凰社

鎬木清方文集　三　先人後人

昭和五十四年五月三十日第一刷發行

著　者　鎬木清方

編　者　山田肇

發行者　高橋謙

發行所　株式會社白凰社
東京都千代田區神田神保町一―二〇
郵便番號　一〇一
電話番號　東京(〇三)二九一―七五七一
振替口座　東京八―九二二四一

印刷・製本　凸版印刷株式會社

定　價　四、三〇〇圓

コード番號　〇三七〇―二一〇三―六九〇六

落丁・亂丁本はお取り替へいたします。

鏑木清方文集　三

先人後人

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

目次

I

先師遺蹟解説……一三
渡邊省亭先生の畫……一六
武内桂舟先生……二〇
梶田半古先生……二五
半古先生のこと……二八

II

邦畫壇の三元老——大觀・栖鳳・玉堂——……三三
今日この時の川合先生……四九

下村さんと其作品……五三
下村氏の業績……五五

Ⅲ

上村松園氏……六一
常緑松園……六四
松園女史に寄せる……六九
上村松園論……七五
青帛の仙女……九一
松園さんを想ふ……九六

Ⅳ

土大夫の書畫……一〇一
土大夫の業……一〇五
小　感……一一三

追憶斷片……二四
平福君を悼む……二八
自然兒百穗……三二
芝居の背景を描いた話……二六
同　想……三〇
春　寒……三三
友緣有情……三六
『室　君』……四六
遺業追懷……四九
金鈴社と松岡君……五五
結城素明君を偲ぶ……六一

V

麥僊氏の藝術……六七
精進の一生……七二

麥僊君回想……一七七
しのぶぐさ……一八三
麥僊君の藝術……一八六
研究室……一八九
研究の一生……一九二
かけがへのない人……一九五
速水御舟のえらさ……一九八
溪仙詩情……一九九
平野の詩人――森田恒友――……二〇四
『平野雜筆』の著者……二〇七

Ⅵ

嘆き――西村五雲さんのこと――……二一一
秋雨抄……二一三
情緒の寫生……二一九

新鮮味……二三二
思ひ出の一端……二三四
契月氏の二つの道……二三六
菊池契月さんのこと……二三二
こころのとも……二三四
石崎光瑤氏……二三七
東京と京都……二四〇
半古門下の二秀才——古徑・青邨——……二五二
影を捉ふ——山口蓬春君——……二五五
深水の一面……二五八
をしへ子深水……二六一
山本丘人さん……二六三

Ⅶ

『插繪節用』序……二六七

組　皿……二六九
草の露……二七二
『雪岱集』序……二七六
『たけくらべ繪卷』……二八七
『近代插繪考』序……二八九
思ひ出の佃小橋……二九二
あとがき……編者　山田肇……二九五

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

圖版目錄

（二重括弧内は作品名）

『西　光』　水野年方（年代不詳）……一四對向
『淺みどり』　鏑木清方（明治三十四、五年頃）……二四對向
上村松園書翰（昭和二十一年七月二十三日付）……九六對向
神戸埠頭にて　鏑木清方（昭和五年二月寫生）……一四四對向
舞妓素描　土田麥僊（年代不詳）……一六六對向
『佃島の秋』　鏑木清方（明治三十七年）……二八八對向

中扉繪は『蘆の芽』（昭和十三年六月刊）からの轉寫。

寫眞　大澤一夫

I

先師遺蹟解説

『御殿女中』『秦武文』『西光』いづれも先師水野年方先生の作で、前の二作は日本美術院の前期の展覽會に出品されたもの、後の一作はたゞの依頼畫とも思はれぬけれど、私の記憶する限りでは、公會の出品には見なかつたやうである。

制作の年代は、三作とも明治三十年代で、この解説を需めらるゝのが急なので、調べる間がないから、判然とした年代は記しかねる。

『御殿女中』は徳川末期の奥女中の紅葉狩で、これは日本美術院が設立されて、谷中初音町に新築された建物での最初の展覽會で、富岡永洗氏の少女猫兒を抱くの圖と隣合つて陳列されてゐた。同時に展觀された作品に、大觀氏の『屈原』、觀山氏の『闍維』などがあつた。

『秦武文』はそれより一二年後れての、上野での開會の時分の出品である。

『太平記』卷の十八、一の宮御息所のこと、と云ふ條に取材したもので、後醍醐天皇の一

の宮中務卿親王、北條の爲めに、土佐の畑へ流されたまひ、侍臣右衞門府生、秦武文を御使に立てさせられて、都堀川に殘された御息所の御迎につかはさるゝ。武文、堀川にまゐつて見れば葎が宿の人すむけはひとてなく、尋ね尋ねて、嵯峨の奥深草のあたり、池の汀の松の嵐も秋すさまじく吹きしほりて、見るも物うげなる宿の内、破れたる小簾より洩れる琵琶の音に、御息所の御ありかをもとめ得て、宮の御玉章を參らする、といふところ。

武文は御息所の御供して、土佐へ下る途で、松浦黨の海賊に襲はれて、御息所を奪はれ、死して幽鬼となつて再び御供を全うすることが出來たといふ物語である。

先生は歴史を好まれたが、中にも『太平記』を愛誦されて、この武文の事蹟など最も悦ばれたものゝ一つであつた。

『西光』は『平家物語』卷の二、西光切られのこと、にある、新大納言成親、西光法師等と謀つて平家を傾けんとする、多田藏人行綱の裏切に依つて囚へられた西光を、西八條に引いた清盛が「入道相國、大床に立ちて暫し睨まへ、あな惡や當家傾けうとする謀反の奴が成れる姿よ」と罵り、履物のまゝに面を蹈む、「西光元より勝れたる大剛の者なりければ、ちとも色も變ぜず、わろびれたる氣色もなく居直り嘲笑つて」却つてさんざんに清盛を嘲るところを繪にしたものである。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com